

各地で話題の病害虫



タマバエの一種
鹿児島大学 湯川淳一氏提供

スイカ半身萎凋病
神奈川県農業総合研究所 提供

ヒメトガリノメイガ
茨城県土浦病害虫防除所 原敏之助氏提供

ニンジン菌核病
埼玉県園芸試験場 善林八朗氏提供

タマバエの一種

学名: *Mycophila* sp.

昭和59年5月、宮崎県下で栽培中のヒラタケを
加害するタマバエが発見され、同定の結果、わが
国未記録の *Mycophila* 属の一種であることが確認
された(鹿児島大学: 湯川、宮崎林試: 讃井)。

本種は、翅長0.9mm内外の極めて小さなタマバエ
で、同属の種はヨーロツパなどに6種類知られて
いるが、新種であるかどうかは今後の研究を要す
る。

本種は、両性生殖だけでなく幼生生殖を行うこ
とが大きな特徴である。そのサイクルは4~5日
(25℃)であり、27℃で母幼虫の個別飼育を開始す
ると、21日後には幼虫数が2,000匹以上に増加する
ことが確認されている。

本種は、幼虫がヒラタケの菌糸及び子実体を食
害し、収穫時に幼虫がみられた瓶のヒラタケは出
荷不可能になる。寄主としては、現在のところヒ
ラタケのほか室内条件下でマイタケ、マンネンタ
ケ、キクラゲ、ナメタケ、マツシユルームが確認
されている。

防除対策としては、薬剤による防除が困難であ
るため、栽培環境の改善や栽培の中止が考えられ
る。

本種がどのようにして、宮崎県のヒラタケを加
害するに至ったかは不明であるが、韓国や台湾で
はマツシユルームを加害するタマバエが知られて
いることから、今後とも調査及び警戒が必要であ
る。

スイカ半身萎凋病

学名: *Verticillium dahliae* Klebahn

英名: Verticillium wilt

わが国におけるスイカ半身萎凋病は、昭和48年
北海道の各地でみられ、その後、長野県、最近で
は神奈川県横須賀市でも発生が確認された。本病
は、*Verticillium dahliae* によって引き起されるス
イカの病害である。

本病原菌は、不完全菌に属するカビの一種で、
分生子柄は基部が無色、多くは3~4本のフィア
ライドを輪生する。分生孢子はフィアライドの先
端から生じ、擬頭状に集合し、無色、単胞、楕円
または、円筒形である。

寄主植物の範囲は大変広く、わが国では、ス
イカ、メロン、キュウリ、トマト、トウガラシ、ピー
マン、シシトウ、ナス、イチゴ、ウド、ハクサ
イ、ダイコンなどの野菜類、バラ、キクなどの花
卉類に被害を与えている。

本病原菌の生態についてはまだ不明な点が多く、
今後、研究を要する。

病徴は主に茎葉にあらわれ、初期症状は葉縁及び葉脈間の一部が脱水状態となり、灰白色を呈し萎凋する。さらに症状が進行すると斑紋は褐変拡大し、葉は枯れるが落葉することはない。症状の最も激しい場合にはつる全体が枯死し、収穫は皆無となる。

り病株の茎、つる基部、根などを切断すると導管部に褐変が認められる。

防除方法としては、寄主植物の連作を避けること、連作を行う場合や発生圃場に作付けする場合には、クロールピクリン剤による土壌消毒が効果的である。発生地では本病に耐病性のあるカボチャ、ユウガオが台木として用いられている。

ヒメトガリノメイガ

学名: *Anania verbascalis* Schiffermüller
et Denis

昨年9月、茨城県南部地域のゴボウ畑に、葉を食害する害虫が発生したため、農業環境技術研究所で同定した結果、近畿地方などでキクの害虫としてごく普通にみられるヒメトガリノメイガであることが確認された。

本種の形態は、メイガ科に属する開長約22mmのガで、成虫の頭部は淡褐色、翅は黄褐色で不規則な模様がある。老熟幼虫の体長は約15mm、頭部は淡黄褐色でやや暗褐色の斑紋が散在している。胸部は全体に淡緑色で、白色のやや幅広い亜背線がある。

分布は日本、シベリア東部から中央アジア、スリランカ、インド、ヨーロッパと広く、平坦地から山地にかけて棲息する。

生態は年3化性で5月ごろからあらわれはじめ、7～9月に多く発生し、最も被害が多いのは9月である。幼虫期間は約1ヵ月間であり、老熟幼虫になると葉を巻いてその中で越冬し、翌春、葉の中で蛹化し、5月中旬に羽化する。幼虫は葉の表面と葉肉を食害し裏面の表皮を残すため、食害部は白くみえる。本虫が大発生した茨城県のゴボウ畑では圃場全体が白色を呈した。

このように、キクの害虫であった本種がゴボウを食害するに至った原因は不明であるが、今後、ゴボウの害虫として注意を要する。

防除方法としては、有機リン剤系のMEP剤、DDVP剤の散布が効果的である。

ニンジン菌核病

学名: *Sclerotinia* sp.
英名: *Sclerotinia* rot

昭和59年、埼玉県朝霞市において栽培され、60年1月以降に収穫されたニンジンの根頭部などに白色綿状のカビを生じ、軟化腐敗する病害が発生した。病原菌の同定試験の結果、以前、北海道で発生したことのあるニンジン菌核病であることが判明した。

本病の病原菌はわが国において、*Sclerotinia sclerotiorum* と *S. intermedia* の2種が報告されている。今回確認された菌は、菌糸の生育及び菌核の形成に関する諸性質が *S. intermedia* に類似している。

病徴は、主に根頭部ないしその3～5cm下の部位に発現する場合が多いため、収穫時にしか病徴を確認することができない。初期症状は、感染部位に淡褐色ないし暗褐色の水浸状の斑点を生じ、症状が進むにつれて病部は軟化腐敗して陥没する。さらに進行すると腐敗部に白い綿状の菌糸を生じ、ついには黒色鼠糞状の直径3～5mmの菌核を形成する。

被害株で形成された菌核は土壌中で越冬する。これが秋になると、子のう盤を形成し、子のう胞子を放出する。この胞子がニンジンの株に付着し発病すると推察されている。

防除方法としては、連作を避けクロールピクリン剤で土壌消毒することが効果的である。

低温が発病の要因となるので、本病の発生時期である1月を避け、できるだけ早い時期に収穫する。

なお、り病株が発見された場合は速やかに焼却、または、地中深く埋没することが必要である。